

諸外国の短波による対日情報発信

～ 1970-80年代前半の公共放送局による日本語放送を中心に～

メディア研究部 田中則広

1970年代から80年代の前半にかけて、日本の青少年の間で、外国から短波で送信されるラジオ番組を聴取する「BCL」が一大ブームになった。多くの国々で日本語番組が制作され、日本の聴取者に向けて放送が行われた。放送の「送り手」の中心は、当時の東側諸国の国営放送局、西側諸国や中立国などの国営放送局および公共放送局、それに、キリスト教の布教を目的とした宗教放送局であった。本稿では、日本語放送実施局のうち、西側諸国の公共放送局が運営していた対日放送に焦点を当て、番組内容、編成、聴取者の反応などに関する資料を基に、これらの放送局が担った役割を検討・分析した。

その結果、日本語放送実施局の中でも、とりわけ公共放送局は、①ある程度まとまった量のコンテンツ発信、②受信環境の整備、③日本の国内事情に通じた放送の専門家の確保、④キラーコンテンツなどの開発による放送局の独自性の創出や他の放送局との差別化、といった、聴取者から支持を得るための要素を満たしており、BCLブームを送り手の側から支えていたことがうかがえた。

はじめに

近年の急速なインターネットの広がりや、携帯端末保有数の増加は、地球規模での情報のやり取りを格段に容易にした。そして今や、世界中の多くの放送局が、時代に適合した「対外発信」にいかに取り組みべきかを模索している。

放送を通じた本国の外への情報発信は、1920年代後半に始まって以来、長年にわたって短波ラジオがその中核を担ってきた。第2次世界大戦の終結と、その後の冷戦体制下で、当時のソ連はモスクワ放送 (Radio Moscow) を通じて大規模な国際放送を展開し、これに対抗する形で米国は国営放送のボイス・オブ・アメリカ (Voice of America, 略称VOA) による国際放送を行うなど、宣伝合戦が繰り広げられた。こうした冷戦下の一時期、1970年代から80年代前半にかけて、日本では主に短波による国際放送を聴取する「BCL (Broadcasting Listeners)」が中高生の間で大流行した。この

「BCLブーム」の背景には、ちょうどこの時期、ソニーや松下電器 (当時) などの電機メーカー各社が、手頃な価格帯で高性能な短波受信機を相次いで販売したことが関係していると見られる¹⁾。

BCLブームの最盛期、例えば1979年8月時点における日本向け日本語放送の「送り手」は、主に宣伝色が強い当時の東側諸国の国営放送局、西側諸国や中立国などの国営放送局および公共放送局、キリスト教系の宗教放送局など18の国と地域の23放送局であった²⁾。一方、放送の「受け手」は10代から20代にかけての男子が中心であった。彼らは海外からの放送を通して、それぞれの国に関心を持つようになり、中には特定の国の言語に関心を持ち、習得に努める者もいた。また、受信した放送の内容や感想について報告書を作成し、放送局に送付することで、「ベリカード (Verification Card の略称)」と呼ばれる受信確認証や、放送局のペ

ナント、カレンダー、書籍等が送られてくることも人気に拍車をかけた。

かつて、日本語放送といえば「宣伝放送」といった負のイメージでとらえられる側面があったが、実際のところ、公共放送局が運営する日本語放送は、宣伝放送ではなく、中立・公正な立場を貫いていたのではないかと、また、聴取者の受け止め方はどうであったのか。本稿では、23の放送局の中から、公共放送局の運営による対日放送に着目し、番組内容、編成、聴取者の反応などを通して、これらの放送局が担った役割について検討した³⁾。ただし、各国の政治状況などにより、公共放送の形態は様々であるため、公共放送を明確に定義するのは困難である。そこで、編集権の自立といった観点から、英国放送協会(British Broadcasting Corporation, 略称BBC)、ラジオ・オーストラリア(Radio Australia)、ドイチェ・ヴェレ(Deutsche Welle)の3局を公共放送局ととらえ、検討対象とした。また、当時のバク・チョンヒ(朴正熙)政権下で言論弾圧が行われていた韓国の場合、編集権の自立といった観点からは不十分であるが、韓国放送公社(KBS)は1973年に国営放送局から公共放送局(韓国での名称は「公営放送局」)に転換したこともあり、KBSの国際放送、ラジオ韓国(Radio Korea)も検討対象に加えた。なお、検討にあたっては、主として当時の専門雑誌や各国の日本語放送局が発行した資料を用いた。

その結果、BCLブーム期の対日放送において、公共放送局は牽引的役割を担っていた実態が読み取れた。受け手の中心が若年層であったため、ニュース・解説などの報道番組よりは、お便り紹介番組や音楽番組などの娯楽番組に人気が集中していた。現在と同様、メ

ディアに対する「双方向性」が求められる中で、公共放送局は、聴取者から寄せられたお便りの紹介を中心に、司会者がトークを進める形式の番組を充実させていった。これにより、聴取者は日本語放送実施局の中では、相対的に公共放送局を高く評価した。また、ラジオ・オーストラリアやBBCの場合、言論の自由度が高い国の放送局であり、しかも、日本から放送の専門家を招聘したことで、聴取者のニーズに合った番組制作の実現を可能にした。

I. 日本向け日本語放送の歴史と概況

海外からの日本向け日本語放送は、第2次世界大戦が終結する以前から行われてきた。実施主体は、南京中央放送、モスクワ放送、VOA、BBC、重慶国際短波放送、インド放送、オーストラリア・コーリング(Australia Calling, 後のラジオ・オーストラリア)で、このほかにも、米国海軍のエリス・ザカライアス(Ellis Mark Zacharias)大佐による放送がアメリカ本土から、米国陸軍のシドニー・マッシュビル(Sidney Forrester Mashbir)大佐による放送がマニラから送信されていた⁴⁾。

1945年に第2次世界大戦が終結すると、世界は米国とソ連を中心とした東西冷戦の時代に突入し、双方による「電波戦」が繰り広げられたが、1960年代以降の東西緊張緩和によって、国際放送による闘いも徐々に沈静化していく。

日本語放送のうち、第2次世界大戦の終結後も継続され、1970年代後半のBCLブームの最盛期まで存続していたのはBBCとモスクワ放送の2局のみであった。また、ラジオ・オーストラリアは、その前身であるオーストラリア・コーリングの時代の1942年5月に日本語放送を開始したが、終戦後間もなく中止となり、1960

年6月19日に再開した⁵⁾。一方、VOA日本語放送は1946年に中止となり、1951年に再開されたものの、日本のテレビ時代においてはラジオを通じての宣伝は効果がないとの判断から、1970年2月28日をもって終了となっていた⁶⁾。

それでは1970年代、どういった国々が日本語放送を実施していたのか。年度によって、多少の変化はあるが、ここでは1970年代末の状況を示した(表1)。日本語放送は、18の国と地域、23の放送機関が実施していた。国連放送やグアムの商業放送局を除外すると、日本語放送局は大きく3つのカテゴリーに分けることが可能であった。①ソ連、中国、北朝鮮など旧東側諸国の国営放送局、②旧西側諸国や中立国などの国営放送局および公共放送局、③キリスト教系の宗教放送局である⁷⁾。

日本語放送を実施していた23の放送機関のうち、4つの公共放送局、および比較対象として、当時、国際放送局としては世界最大級の規模を誇っていたモスクワ放送の計5局の略史と番組表(1979年)をみていきたい。

ラジオ・オーストラリア

まず、ABC (Australian Broadcasting Commission, 現 Australian Broadcasting

Corporation) 運営のラジオ・オーストラリアから見ていく。1939年12月20日に「オーストラリア・コーリング」として放送されるようになったとき、放送局には、戦時放送としての明確な特徴があった。その任務は、海外のオーストラリア軍関係者に、国内番組や特別に用意された番組を届け、枢軸国のプロパガンダに対抗することであった。戦時中、日本軍関係者や日本の占領下に置かれていた人々のために、日本語、タイ語、インドネシア語、標準中国語が加わった。番組内容の管理は、情報局とオーストラリア放送委員会(ABC、オーストラリアの公共放送サービス)との間を行き来し、1944年、結局、情報局が行うことで落ち着いた。戦後、国際放送は続いたが、名前が「ラジオ・オーストラリア」に変わった。1950年、国際放送の管理は再びABCに戻った⁸⁾。そして、日本語放送は、1960年6月19日に再開、1日1時間の放送であった。第2放送が増設された1974年11月3日からは、1日2回、計2時間の放送になった。1979年の時点では日本語のほか、インドネシア語、中国語、ベトナム語など8つの言語で放送を行っていた。

ラジオ・オーストラリアは、良好に受信できる上に、番組の種類も豊富なことから、日本語放送の中では最も人気が高かった。

表1 日本向け日本語放送一覧(1979年8月時点)

局名	国・地域名	カテゴリー	局名	国・地域名	カテゴリー
KGEI 友情の声	米国	③	KRT 朝鮮中央放送	北朝鮮	①
UNR 国連放送	国連	※国連放送	DW ドイチュ・ヴェレ	西ドイツ	②
RAE アルゼンチン国営放送	アルゼンチン	②	RV パチカン放送	パチカン市国	③
BBC 英国放送協会	英国	②	FEBC 極東放送	フィリピン	③
HCJB アンデスの声	エクアドル	③	RVA ラジオ・ベリタス・アジア	フィリピン	③
ABC ラジオ・オーストラリア	オーストラリア	②	VOV ベトナムの声	ベトナム	①
KBS ラジオ韓国	韓国	②	RRI インドネシアの声	インドネシア	②
HLDA 亜細亜放送	韓国	③	KTWR トランス・ワールド・ラジオ	グアム	③
SLBC スリランカ放送協会	スリランカ	②	RT ラジオ・タイランド	タイ	②
RM モスクワ放送	ソ連	①	KATB	グアム	※商業放送
RP 北京放送	中国	①	KUAM	グアム	※商業放送
VOFC 自由中国之声	台湾	②			

【短波】(通巻第45号、1979年11月、49-59頁)を基に作成

表2 ラジオ・オーストラリア日本語番組編成表

	時間	日	月	火	水	木	金	土
第1放送	19:00	サンデー ジャンボリー	ダグと一緒に	トップテン 6～10位	オーストラリア昔話	放送雑誌	トップテン 1～5位	DJ ずてきなあなたに
	19:20		科学談話室	歴史を語る	日豪ポップパレード	オーストラリア紹介	トピックス	
	19:30	ニュース	ニュース					ニュース
	19:40		時の動き					
	19:45	DX タイム	ハロー日本					ブラクティシング イングリッシュ
	20:00							
第2放送	22:00	ニュース	ニュース					ニュース
	22:10		時の動き					
	22:13	声の交換室	オーストラリアーナ	オーストラリアの ア・ラ・カルト	キーボードで おしゃべり	日本の友へ	椰子の実先生 漂流記	リスナーの広場
	23:00							

出典：『短波』通巻第47号，1980年1月，64頁

例えば、音楽番組の『トップテン』では、オーストラリアのヒット曲の1位から10位までを放送しており、オーストラリア国内とほとんど変わらない早さでヒット曲を楽しむことができた。また、オーストラリアの軽い話題とヒット曲をミックスしたディスク・ジョッキー番組も人気が高く、その典型がジョージ・ルイカー（George Luiker）氏の『日豪ポップパレード』であった。ジョージ・ルイカー氏は日本の映画界や放送界で長年にわたって活動していたため、ファンが多かった。このほか、『DX タイム』では、短波などの放送に関心を持つ聴取者にとっては魅力ある最新のDX情報が伝えられた。

なお、ラジオ・オーストラリアの日本語放送は財政的理由により、1990年12月31日に打ち切られた。

表3 BBC 日本語番組編成表

時間	日	月～金	土
7:00	ニュース	ニュース 英語でどうぞ	ニュース 時の問題
｜	時の問題	時の問題 民謡	サバイバル・イングリッシュ
7:15	英語でどうぞ	一口案内 ニューアイデア	土曜日様々
｜	ミュージック・アルバム	科学ジャーナル	
7:30		けさの話題	ニュースの項目
20:00	ニュース	ニュース	ニュース
20:10	今日のイギリスの新聞から	今日のイギリスの新聞から	今日のイギリスの新聞から
20:15	ニューアイデア	レター・ボックス	ニューアイデア
｜	イギリスの民謡	一口案内	きょうの話題
20:30			英語のレッスン

出典：『短波』通巻第47号，1980年1月，63頁

BBC

次に、英国BBCの国際放送であるが、1932年12月19日に英連邦諸国との友好を深める目的で英語放送を開始した。その後、1938年1月3日に、英語以外の最初の放送としてアラビア語放送を、続いてドイツ語、イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語を、1943年7月4日からは、1日30分の日本語放送をスタートさせた⁹⁾。1979年時点で39言語の短波による国際放送を実施していた。

BBCの報道は、迅速さと公平さに定評があり、朝および夜の放送ともに『ニュース』、『時の問題』、『けさの話題』、『今日のイギリスの新聞から』など、報道関連の番組が多くを占めていた。また、教養番組としては、『ニューアイデア』や『科学ジャーナル』などの番組があった。

『ニューアイデア』では、技術革新といえるものから、主婦や子どもの思いつきまで、様々なアイデアから生まれた新製品が紹介された。音楽番組には『ミュージック・アルバム』や『イギリスの民謡』が、お便り紹介番組には『レター・ボックス』が、英語講座番組には『サバイバル・イングリッシュ』があった。

BBC日本語放送は、ラジオ・オー

ストラリアの日本語放送が終了した3か月後の1991年3月30日、財政的理由などによって打ち切られた。

ドイチェ・ヴェレ

当時、西ドイツのケルンから放送していたのがドイチェ・ヴェレであった。ドイツは1929年に始まった8KW短波サービスにより、初期の国際放送のリストに載っていたが、1945年には、リストから完全に姿を消した。その理由ははっきりしている。ナチス政府が国際放送をプロパガンダの主要な道具のひとつにし、国際放送を通して、脅迫や強要のキャンペーンを行い、誤報を広め、破壊活動を促したからであった¹⁰⁾。戦後の1940年代後半から50年代初頭、ドイツでは、「ドイツについて世界に伝える」ことへの関心が高まった。それと同時に、連邦政府は、新たに設立されるいかなる国際放送局も、州ではなく連邦政府がこれを運営すべきと主張した。しかし、州側が勝利をおさめ、1953年5月、ドイチェ・ヴェレ（「ドイツの波」）の放送を開始、州同士が共同で設立した放送組織ARD（ドイツ公共放送連盟）を通して、これを運営した¹¹⁾。また、ドイチェ・ヴェレで初めて外国語の番組も放送されたが、当初の外国語番組は、極東、中東、アフリカ向けの、5分間の英語とフランス語のニュース、南米向けの5分間のスペイン語とポルトガル語のニュース、北米向け

の10分間の英語ニュースであった。1959年3月25日にアラビア語のテスト番組が始まり、同年4月1日にアラビア語番組が定期放送となり、ドイチェ・ヴェレによる外国語サービスの集中的な強化が図られた¹²⁾。そして、1969年5月15日、ドイチェ・ヴェレは日本語およびマケドニア語による国際放送を新たにスタートさせた¹³⁾。1979年時点においてドイチェ・ヴェレは34言語で国際放送を実施していた。

ドイチェ・ヴェレの平日の番組の中心にあったのは、ニュース解説から軽い話題まで幅広く扱った『放送マガジン』であった。『きょうのメロディー』の後は、『若い世代』、『ドイツ北から南から』、『科学トピックス』、『文化ジャーナル』、『世界の窓』など、ドイチェ・ヴェレの特徴ともいえるような、硬派な内容の番組が続いた。日曜日には『音楽マガジン』や『お便りありがとう』といった音楽番組、お便り紹介番組が放送された。1999年12月31日、ラジオ・オーストラリアやBBCと同様、ドイチェ・ヴェレも日本語放送を終えた。

ラジオ韓国

隣国の韓国が本格的に国際放送の実施に向けて動き出したのは、朝鮮戦争が休戦となった1953年7月以降であった。

1953年8月15日に、韓国駐留米軍向けの中波による英語放送Voice of Free Koreaが放

表4 ドイチェ・ヴェレ日本語番組編成表

時間	日	月	火	水	木	金	土
20:15	ケルンからひとこと	ニュース・音楽					
20:30	音楽マガジン	放送マガジン					
20:50	お便りありがとう (第1, 3, 4日曜)	きょうのメロディー (~21:00)					ドイツ語講座
21:15	書棚から(第2日曜)	若い世代	ドイツ 北から南から	科学トピックス	文化ジャーナル	世界の窓	
	放送局めぐり(第5日曜)						

出典：『短波』通巻第47号、1980年1月、68頁

送を開始、1955年12月には初めての外国向け放送として毎日15分の日本語放送が始まった。その後、放送時間は徐々に増え、短波による放送も始まり、1961年からは新設されたソウル国際放送局の海外課極東係が日本語放送の担当になった。そして、1965年には、現在も放送中の看板番組『玄海灘に立つ虹』がスタートした。1968年にはソウル国際放送局がソウル中央放送局、ソウルテレビジョン放送局とともに国営の中央放送局に統合され、1973年に中央放送局は公共放送のKBSとなり、ほどなくしてVoice of Free KoreaはRadio Korea（ラジオ韓国）に改称された¹⁴⁾。1979年時点では、9つの言語により国際放送を実施していたが、他の3つの公共放送局とは異なり、2014年の現時点においても、日本語放送を含む計11の言語で放送を行っている。

ニュースとニュース解説の後の『玄海灘に立つ虹』が最も人気のある番組で、聴取者からのお便りを紹介しながら、出演者たちがトークを進め、あわせて、韓国の身近な話題や音楽などを紹介するといった内容であった。このほか、『韓国の若い世代』、『文化の香り』、『韓国さまざま』、『韓国への旅』などを通して韓国を多角的に紹介したほか、『KBSサロン』では、

韓国に住む日本人、韓国を訪問した日本人をスタジオに招いてインタビューを行った。また、『KBSゴールデン・リクエスト』や『韓国の音楽』などの音楽番組も人気があった。

以上、4つの公共放送局について記した。これに対して、旧東側諸国が実施する国際放送は概して時間量が多く、モスクワ放送をはじめ、中国の北京放送、それに北朝鮮の朝鮮中央放送に至っては1日の放送時間量が10時間近くに達していた。これらの放送局に比べると、ラジオ韓国を除く公共放送局の放送時間量はかなり少なかった。旧東側諸国の国際放送の代表例として、放送時間数や使用言語数などでは当時、世界最大級の規模であったモスクワ放送についてふれておく。

モスクワ放送

ソ連は第2次世界大戦以降、世界の主要大国のひとつとなり、もちろん、共産圏最大の大国となった。従って、モスクワ放送の内容は、世界にとって、それなりに興味があるはずである。モスクワ放送は1929年の発足以来、着実に成長を続けた。最初はロシア語、ドイツ語、フランス語、英語の4言語であった。その全

表5 ラジオ韓国日本語番組編成表

時間	日	月	火	水	木	金	土
15:00 16:00	週刊ニュース 今週の論調 話題のベンチ KBS ゴールデン・リクエスト 北韓の実情	ニュース ニュース解説 玄海灘に立つ虹					
		KBS サロン	韓国の若い世代	文化の香り	韓国さまざま	韓国への旅	放送週刊誌
16:00	週刊ニュース 今週の論調 話題のベンチ KBS ゴールデン・リクエスト 北韓の実情	韓国の音楽					
17:00 17:30	今日の実情 今日の音楽	ニュース ニュース解説					
		アンニョンハシムニカ ソウルです					DX コーナー
		韓国語講座	やさしい韓国語				
		ニュース		ニュース解説	今日の音楽	連続朗読	

出典：『短波』通巻第47号、1980年1月、70頁

表6 モスクワ放送日本語番組編成表

時間	日	月	火	水	木	金	土
17:00	ニュース・ソ連の平日・ルポなど			ニュース シベリア・極東案内	ニュース お返事の時間	ニュース ソ連の平日	ニュース ラジオ懇談会
17:30	ニュース 文芸放送	ニュース 科学と技術	ニュース 時事解説 現代ソビエトの音楽	ニュース 時事解説 クラシック音楽のコンサート	ニュース ロシア民族音楽	ニュース 時事解説 ソ連民族のメロディー	ニュース ソ連の平日 音楽番組
18:15	ソビエトだより 音楽番組	ソビエトだより 時事解説	ソビエトだより ロシア語講座	ソビエトだより シベリア・極東案内	ソビエトだより お返事の時間	ソビエトだより 時事解説	ソビエトだより ラジオ懇談会
19:00	ソビエトだより お返事の時間	サハリン放送局の プログラム	ソビエトだより 時事解説		ハバロフスク放送局 のプログラム	ソビエトだより 時事解説	ウラジオストク放送 局のプログラム
19:30 20:00	ニュース 聴取者の手紙	ニュース 友好と善隣	ニュース ソビエト文化	ニュース スポーツの時間	ニュース ソビエトのパノラマ	ニュース 科学と技術	ニュース
21:00 21:30	今週の世界	ニュース 青年放送	ニュース・ラジオジャーナル「今日の話題」				
22:00 22:30	今週の世界	ニュース 友好と善隣	ニュース ソビエト文化	ニュース スポーツの時間	ニュース ロシア語講座	ニュース 科学と技術	リクエスト音楽
23:00 23:30	ニュース 聴取者の手紙	ニュース 青年放送	ニュース・ラジオジャーナル「今日の話題」				

出典：『短波』通巻第47号，1980年1月，66頁

部が毎日放送されていたわけではなかったが、1933年までに11言語（そのほとんどはヨーロッパ言語）に増えた。初期の番組は主に、革命が何を成し遂げたか、国はどのように共産主義に向けて進んでいるか、それによって、労働者と農民がどのような恩恵を受けているかなどを説明するように作られていた¹⁵⁾。モスクワ放送の使用言語は1969年の時点ですでに64言語であったが、1970年代を通じて大きな変化はなく、1979年時点においても64言語で放送が実施されていた。

モスクワ放送の番組には、ソ連全般について紹介する『ソビエトだより』や『ソビエト文化』、音楽番組の『現代ソビエトの音楽』や『ソ連民族のメロディー』、聴取者と放送局をつなぐ『聴取者の手紙』や『お返事の時間』などがあった。また、モスクワ制作の番組のほか、サハリン、ハバロフスク、ウラジオストクの各放

送局で制作された番組を放送するなど、地理的に日本に近い沿海州の情報を聴取者に伝えていた。デタントが進んだ1970年代であったが、冷戦下であることに変わりはなく、番組の多くはソ連のプロパガンダの側面が色濃く反映されており、全体としては堅い内容の番組が多かった。ただし、ソ連情報の入手が困難な時代にあって、モスクワ放送を継続的に聴取することは、ソ連の状況を知る上で必要不可欠であり、この放送はまさにソ連情報を得るための貴重な情報源であった。

II. 放送時間量に見る対日発信

ここでは、日本語放送実施局の放送時間量を検証する。各公共放送局のほか、モスクワ放送、それに、放送時間量の少ない放送局として、ラジオ・タイランド、国連放送、スリランカ放送協会を取り上げる。表7は、1972年と1979

表7 日本語放送時間量 (1週間あたり)

	1972年	1979年
ラジオ・オーストラリア	7時間	14時間
英国放送協会(BBC)	5時間15分	7時間
ドイツ・ヴェレ	7時間	7時間
ラジオ韓国	17時間30分	59時間30分
モスクワ放送	31時間30分	31時間30分
ラジオ・タイランド	—	2時間20分
国連放送	—	10分
スリランカ放送協会	30分	30分

【WORLD RADIO TV HANDBOOK】(1972年版、1979年版)、
【短波】(通巻第35号、1979年1月)を基に作成

年の両年について、1週間あたりの日本語放送時間量を放送局ごとに示したものである¹⁶⁾。

ラジオ・オーストラリアは、1972年には、英語以外に7つの言語で放送を行っていた。言語別放送時間量では、インドネシア語放送が最も多く、フランス語、中国語が続き、日本語、広東語、ベトナム語、タイ語が毎日1時間、週7時間であった。しかし、日本語放送は1974年11月に第2放送を開始したため、1979年時点では、日本語、広東語放送の時間量が毎日2時間、週14時間へと倍増し、一方で、ベトナム語やタイ語放送は従来通りの週7時間となっていた。

BBCの日本語放送は1972年の放送時間量が週あたり5時間15分であったが、1979年には週あたり7時間になっている。ただし、自国語である英語を除いた国際放送全言語の放送時間量全体に占める日本語放送の割合は、1972年の0.82%から1979年には0.75%に低下している。このことから、日本でBCLが最盛期を迎えていた1970年代後半、BBCは日本語放送よりもむしろ他言語の放送の拡充に力を注いでいたことが分かる。ただし、1979年に英国の首相に就任したマーガレット・サッチャー(Margaret Hilda Thatcher)が実施

した緊縮財政路線の影響を受け、その後、BBCの国際放送は縮小していく。

ドイツ・ヴェレの場合、1969年に日本語放送をスタートさせているが、4つの公共放送局の中では唯一、1970年代には放送時間量に変化がなかった。毎日1時間、週7時間の放送で、BBCとともに、放送時間量の少ない公共放送局であった。

そして、ラジオ韓国であるが、1960年代初頭の韓国はまだ、経済的には貧しかった。しかし、パク・チョンヒ政権の主導により、ベトナム戦争への参戦や、「日韓基本条約」の締結を契機とした日本からの経済・技術援助を要因として1960年代後半以降、経済発展を続けていた。一方で、民主化などの運動は厳しく押さえ込まれていた。国際放送の実施機関であるKBSは、1970年代になり国営放送から公共放送へと組織転換を図ったが、報道の自由は制限されたままであった。1972年時点での放送時間量について、日本語放送は再放送を含めて毎日2時間半、週あたり17時間30分実施しており、モスクワ放送の日本語放送に次ぐ時間量であった。これが1979年になると毎日8時間半、週あたり59時間30分へと3倍以上に増加し、放送時間量でモスクワ放送を追い抜くまでになった。日本は地理的に近い上に、政治や経済などのあらゆる面において利害関係が深いため、自らの主張を伝えるためのひとつの手段として日本語放送が積極的に活用されていたことが分かる。同時に、北朝鮮の朝鮮中央放送との間で展開された「宣伝合戦」といった側面もあったと考えられる。

モスクワ放送は、当時、米国のVOAなどとともに、短波放送による情報発信を積極的に展開していたが、日本語放送の時間量は1972

年、1979年のいずれも毎日4時間30分、週あたり31時間30分と、変化は見られなかった。ただし、1972年から1979年の間にモスクワ放送全体の放送時間量は約1.5倍に増加しているため、日本語放送の占める割合は相対的に下がったことになる。

公共放送局の運営による日本語放送のうち、ラジオ・オーストラリアとラジオ韓国はBBCやドイチェ・ヴェレと比べて放送言語数が少なかった。後者2局と比べると、前者2局は国際放送局としての規模は小さかったが、放送対象地域として日本を重視していたため、放送時間量が多く、また、自局の国際放送全体に占める日本語放送の割合が高い上に、1970年代には日本語放送を拡充していた。隣国に向けての情報発信の重要性といった観点からは、ラジオ韓国において日本語放送の割合が高かったのは当然であるが、ラジオ・オーストラリアの場合も、放送使用言語を見ると、アジア・太平洋地域の国々に対しての情報発信に力を入れていることが分かる。とりわけ、インドネシア向けインドネシア語放送の割合が圧倒的に高かったが、日本語放送の拡充についても、欧米諸国に比べると地理的に近い日本とは、経済面での結びつきが強くなる中で、人々の相互理解促進にも注力しようとしていたことが推察される。

これに対して、放送時間量の少ない放送局としては、1978年に日本語放送を開始したばかりのラジオ・タイランド（毎日、日本時間の23時30分から20分間の放送で、週あたりの放送時間量は2時間20分）や、週数回の放送にとどまっていたスリランカ放送協会（日本語放送）があった。1971年に日本語放送を開始したスリランカ放送協会では、スリランカ在住の日本人で主婦の岡田陽子氏がひとりで日本語放送を

担当していた。そのため、毎週月曜日と金曜日の2回、15分間の放送を行うのがやっとであった¹⁷⁾。また、国連放送は、放送時間量が圧倒的に少なく、週1回、土曜日の19時5分から10分間の放送（ただし、総会開催期間は、火曜日から土曜日まで）にすぎなかった。

これらのことから、ラジオ韓国を除く公共放送局は週あたり7～14時間の放送、すなわち、毎日1～2時間の放送を実施していたのに対し、先述したとおり、モスクワ放送など旧東側諸国の放送局は、時間量がかなり多かったことが分かる。その一方で、公共放送局よりもはるかに少ない、例えば、1週間の放送時間が1時間に満たない放送局も複数存在していた。

Ⅲ．日本国内における受信状況

国際放送の運営にあたっては、一定程度の放送時間量を確保することは必要であるが、ただ時間量が多ければ良いというものでもない。短波の性質上、受信状態は季節、時間帯、場所などの影響で変化するため、聴取者に対して良好な受信環境を提供できているのかといったことにも注意を払う必要がある。この点を検討するにあたり、1979年9月23日に日本の聴取者がすべての日本語放送実施局に対して行った受信状況に関する調査の結果が有用である¹⁸⁾。表9は、各局の全周波数について、日本での受信状況を記したものである。全国を9地区に分けて地域ごとに調査が行われたが、本稿では人口の多い、関東、中部、関西の3地域に限定して掲載した。なお、受信状態はSINPOコードを用いた。SINPOコードとは、一見して受信状態を判断するために考案されたコードで、S (Signal Strength) は受信時の信号強度、I (Interference) は混信、

表8 SINPOコード

	S 信号強度	I 混信	N 雑音	P 伝播障害	O 総合評価
5	非常に強い	全然ない	全然ない	全然ない	最良
4	強い	少しある	少しある	少しある	良い
3	普通	かなりある	かなりある	かなりある	普通
2	弱い	相当ある	相当ある	相当ある	悪い
1	かろうじて聞こえる	非常にある	非常にある	非常にある	全然聞きとれない

出典：野口実、赤林隆仁著、ニッポン放送編『世界の放送 BCLのすべて』国際コミュニケーションズ、1975年、82頁

N (Noise) は雑音, P (Propagation Disturbance) は伝播障害, すなわち電波が伝わる時の障害を指す。そして, O (Overall Rating) は受信した放送全体の総合評価を意味する。評価は5段階で, 点数が高いほど, 状態が良いことを意味する (表8)¹⁹⁾。

まず, 公共放送4局の受信状態を見てみると, 最も受信状態が良かったのはラジオ韓国で, SINPOのO (総合評価) は3ないし4であった。ラジオ・オーストラリアも総合評価は3ないし4であったが, 3がより多い状態であった。この2つの放送局は比較的良好な受信環境を提供していたといえるが, ヨーロッパの2つの放送局についてはどのような状況にあったのか。BBCの場合は一部の周波数で総合評価に4がついているが, 大体において2ないし3であった。ただ, 各時間帯に良好に聴取できる周波数がひとつはあった。これに対してドイチェ・ヴェレは21650kHzのみが総合評価で3となっているが, それ以外の周波数は極めて状態が悪い。当時は25mバンド (11600kHz ~ 12100kHz) までの短波帯であれば受信可能なラジオが多かったが, 21650kHzの周波数を受信するためには, 本格的なBCLラジオを入手する必要があったので, ドイチェ・ヴェレは送信周波数の点で十分な受信環境を聴取者に提供できていなかったといえる。

モスクワ放送は表からも明らかなように, 時

間帯によってばらつきはあるものの, 1回の放送に対して, 非常に多くの周波数を使用していた。そのため, 比較的受信状態が良好な周波数を選択すれば, 最低でも総合評価3以上の受信が可能であった。また, 夕方から夜にかけては中波の1251kHzが良好に受信できるなど, 十分な受信環境を提供していた。

これに対して, ラジオ・タイランドはほとんど受信不可能な状態, 週10分間のみの国連放送は総合評価3ないし4, スリランカ放送協会, アンデスの声, バチカン放送, インドネシアの声は平均2から3という不良状態にあった。このほか, アルゼンチン国営放送に至っては, 全く受信ができなかったため, 表の作成も不可能であった。当時, 9690kHzの1波だけで放送していたこの放送は「日本で聞くことのできない日本語放送」として有名であったが, その理由は9690kHz付近に台湾からの中国大陸向け放送が出ており, その放送に対して中国が強力な妨害電波を発射していたからであった²⁰⁾。

このように, 受信状況に関しては公共放送局の場合, 良好な受信環境を提供できていた放送局と, そうでなかった放送局とに分かれていた。また, モスクワ放送の場合は, 良好な受信環境を提供していたといえる。その一方で, 中小の国々の放送局は財政上の問題なども絡んで, 良好な受信環境の提供が困難なところが多かったようである。

表9 日本語放送モニター結果

(1979年9月23日実施)

ラジオ・オーストラリア 19:00～

周波数 (kHz)	関東	中部	関西
9760	44443	44443	44443
21660	44443	43443	44443

22:00～

17795	34443	44444	44433
21660	44433	44444	44444

BBC 7:00～

周波数 (kHz)	関東	中部	関西
9580	44443	43433	44433
9825	34332	33333	34333
11850	44444	44433	44443
11865	44444	44443	44444
15270	32442	42442	21331

20:00～

9725	42332	42432	43432
11955	44444	44444	44444
15360	44443	44433	44443
18080	24232	23331	25332
20345	25342	24332	24332
23191	35343	13321	24442

ドイツ・ヴェレ 20:15 開始時

周波数 (kHz)	関東	中部	関西
9605	0	0	0
11765	0	0	0
15135	0	0	0
17825	31431	31431	22331
21650	34433	33343	34433

21:15 終了時

9605	0	0	0
11765	0	0	0
15135	34433	22431	32332
17825	32332	32432	32332
21650	44333	34433	44433

ラジオ韓国 6:30～

周波数 (kHz)	関東	中部	関西
7275	44444	43443	44434

10:00～

7275	35433	34333	45444
9640	44444	44444	45444

15:00～

7275	44444	44444	44444
------	-------	-------	-------

20:00～

972	44443	43443	44443
6015	45444	45444	44443
6135	44443	44444	44433
6165	44444	44433	44444
7275	44444	43433	44444

0:00～

891	44443	34433	44443
1449	43433	34443	44443

モスクワ放送 17:00～

周波数 (kHz)	関東	中部	関西
720	24342	0	33332
1251	34333	34443	44443
7245	44444	44444	44444
11602	43443	33433	0
11690	43433	33432	33332
15300	0	31421	0
17885	44444	44444	44444

17:30～

630	0	0	0
720	34332	32321	24331
1251	34433	44444	44444
6050	32332	31431	43433
9540	44444	44443	44443

9590	43443	32332	44433
11915	33333	33432	33432
12070	44443	33433	44433
15245	44443	44443	44443
17700	44443	43433	44443

19:30～

9600	43332	32332	44433
15300	32332	32432	44443
16250	44443	34433	44444

21:00～

630	34333	33433	33332
720	34433	43433	33432
1251	44444	44443	44444
7245	43443	43433	43433
9600	43333	42432	44333
11720	44444	43443	44443
11770	44343	43433	44433
16250	44443	33433	34443

23:00～

7100	43443	34333	34433
7185	44443	43433	44333
12040	44444	44443	43433
15780	34443	45443	34433

ラジオ・タイランド 23:30～

周波数 (kHz)	関東	中部	関西
9654	22331	32331	11211
11905	0	0	0

国連放送 22日(土) 19:05～

周波数 (kHz)	関東	中部	関西
9565	44444	44433	44434
11090	33433	32442	33443
15250	44444	44444	44443

スリランカ放送協会 24日(月) 23:30～

周波数 (kHz)	関東	中部	関西
15120	32332	32432	33332
17850	43433	23332	32332

アンデスの声 6:30 南米向け

周波数 (kHz)	関東	中部	関西
7275	24332	33432	23432

上の2段 日本向け開始時 20:30

下の2段 日本向け終了時 21:30

9715	34433	33433	44333
11945	32332	23221	22221
9715	32332	33432	33332
11945	0	32431	32332

パチカン放送 22日(土) 19:30～

周波数 (kHz)	関東	中部	関西
15400	34332	32432	22331
21500	44333	34333	34333

23日(日) 6:50～

9615	44443	34433	44433
11830	44444	43443	44444
15120	22332	31431	33432

インドネシアの声 21:00

周波数 (kHz)	関東	中部	関西
11790	44443	43433	44333
15250	33332	33432	34333

(受信状態は SINPO コードで表記)

出典:『短波』通巻第47号, 1980年1月, 75-77頁

IV. 公共放送による番組の編成・制作の取り組み

一定以上の放送時間量があり、かつ、電波が良好な状態で受信できたとしても、当然ながら何を伝えるのかが放送局の人気を左右する。そこで、日本BCL連盟が1981年、『短波』誌上で実施した「日本語放送番組人気投票」の結果から、当時の人気番組の特徴について見ていく²¹⁾。また、『短波』誌に掲載された読者の声を紹介しつつ、当時の「キラコンテツ」であったお便り紹介番組と音楽番組に対する反響、それに、国によって大きく異なる言論の自由の度合い、また、良質な番組の制作を支えた日本人ジャーナリストたちについて考察する。

1981年実施の「日本語放送番組人気投票」によると、最も人気の高かった番組は、聴取者からのお便りを紹介するラジオ韓国の『玄海灘に立つ虹』であった。得票数は125票で、2位の番組の倍以上の票数を集めるほどの人気ぶりであった。ラジオ韓国とは対照的に、ラジオ・オーストラリアは3位の『リスナーの広場』、4位

の『トップテン』、6位の『声の交換室』、13位の『キーボードでおしゃべり』、15位の『ハロー日本』と、実に上位15本中、5本を占めるほど、人気番組が豊富であった。その結果、ランキングに登場した15本のうち、過半数の8本が公共放送局の番組によって占められた。

人気番組の種類について、ランキングの上位には、1位の『玄海灘に立つ虹』や3位の『リスナーの広場』、6位の『声の交換室』など、聴取者からのお便りを紹介する番組が多かった。また、音楽番組の人気も高く、4位の『トップテン』のほか、旧東側諸国の放送局も、5位に朝鮮中央放送の『おのぞみ音楽』、13位にモスクワ放送の『リクエスト音楽』が登場している。

〈人気番組①「お便り紹介番組」〉

日本と韓国の間で「日韓基本条約」が結ばれてから2か月余り経った1965年9月2日、ラジオ韓国日本語放送の看板番組『玄海灘に立つ虹』がスタートした。内容は基本的には男女2人の担当者が、聴取者から届いた手紙、音楽、そして、韓国の様々な出来事を伝えていく形式

で進められた²²⁾。聴取者は投書で、「『玄海灘に立つ虹』

は、日本のリスナーからの手紙を紹介してくれる番組で、楽しい番組です」²³⁾、「この局の番組の中では、僕は『玄海灘に立つ虹』がとても好きです。手紙を読みながら、韓国の様子、たとえばサッカー大会があって、どこが優勝したとか、その時の観客の応援ぶりなど、リスナーが興味をひかれるように話してくれるか

表 10 人気番組ランキング (1981年実施)

順位	番組名	放送局名	得票数
1	玄海灘に立つ虹	ラジオ韓国	125
2	金子耕式のボイス オブ フレンドシップ	KGEI (友情の声)	55
3	リスナーの広場	ラジオ・オーストラリア	46
4	トップテン	ラジオ・オーストラリア	43
5	おのぞみ音楽	朝鮮中央放送	40
6	声の交換室	ラジオ・オーストラリア	38
6	外国人の見た朝鮮	朝鮮中央放送	38
6	ニューアイデア	BBC	38
9	放送マガジン	ドイチェ・ヴェレ	29
9	こちら HCJB です	HCJB (アングスの声)	29
9	小西達朗の土曜の夜をぶっとばせ	FEBC (極東放送)	29
12	カリフォルニアがいっぱい	KGEI (友情の声)	27
13	キーボードでおしゃべり	ラジオ・オーストラリア	26
13	リクエスト音楽	モスクワ放送	26
15	ハロー日本	ラジオ・オーストラリア	21

出典：『短波』通巻第63号、1981年5月、146頁

らです。これからもずっと続けていってほしいものです」²⁴⁾、「リスナーからの手紙を、とても大切に読んでいてよい。一度読んでから内容について、もう一度話してくれる」²⁵⁾などといった好意的な感想を寄せている。

一方、ラジオ・オーストラリアのお便り紹介番組は、聴取者の手紙だけでなく、聴取者の「声」までも紹介した。人気番組6位の『声の交換室』では、カセットテープに5分以内で、住所、氏名、年齢、趣味や番組にふさわしい話題、住んでいる町の様子、学校での出来事などを吹き込んだ「声」を募集しており、送り先はメルボルンのラジオ・オーストラリア、あるいは、東京の日本放送協会(NHK)放送センター内のABC東京支局であった²⁶⁾。『短波』誌には、この番組に関して「1週間に届くテープは3～4本と少なく、応募すれば必ず採用されます。皆さん、どしどしカセットを送りましょう」²⁷⁾といった呼びかけや、「5月13日「声の交換室」で、僕のテープが出たのですが、うっかり消してしまったのです。どなたかこの日のテープを持っておられる方はお貸しくありませんか」²⁸⁾といったお願いなどが掲載されており、聴取者の関心の高さを示していた。

〈人気番組②「音楽番組」〉

ラジオ・オーストラリアの人気は、聴取者からのお便りや声のメッセージなどを紹介する『リスナーの広場』や『声の交換室』といった番組とともに、音楽番組の『トップテン』などによって支えられていた。『トップテン』は、音楽の紹介にあたって、ポピュラー音楽中心のメルボルンの民放局、3XYが新聞に発表したヒット・チャートを参考にしていた²⁹⁾。

ただし、ラジオ・オーストラリアで放送され

るそのほかの音楽番組については、日本の音楽が比較的多く流されていたが、これについては否定的にとらえる聴取者と、これとは反対に、肯定的にとらえる聴取者との間で、議論が展開されていた。否定的な意見としては、「日本の音楽は、国内の放送で聞けるので、オーストラリアの音楽を流してほしい」³⁰⁾、「オーストラリアの放送だから、オーストラリアの民族音楽、民謡をかけてほしい。ほくたち日本の音楽を聞くためにABCを聞いているのではないのだから……」³¹⁾などといったものがあつた。一方、肯定的な意見には、「むしろ、いいことだと思います。海を越えて、やってくる日本の流行歌を聞くのも、一風変わっていて、楽しいと思います」³²⁾、「よく日本の音楽がかかるのは良くないという意見がありますが、なぜ良くないのかぼくにはわかりません。外国から流れてくる日本の音楽も、一味違った感じで良いと思います」³³⁾などといったものがあつた。この点に関して、ラジオ・オーストラリアの日本語放送アナウンサー大村清氏は番組の中で、「ラジオ・オーストラリアとしては、日本の民間放送を聞こうか、それともABCを聞こうか、という感じで聞いてもらいたい」と発言している³⁴⁾。

ラジオ・オーストラリアは当時、日本語放送局の中でも最も人気がある放送局で、聴取者から高く評価されていた一方、厳しい意見も多数寄せられていた。聴取者の意見を真摯に汲み取ろうとする同局の姿勢に対し、さらなる発展を望む聴取者の期待が厳しい意見となって表れたといえよう。

〈言論の自由との関係性〉

政府からの独立性といった点では、BBCやラジオ・オーストラリアは似たような状況にあつ

た。

BBCに対する信頼性については、聴取者の投書から読み取ることができる。例えば、「なぜBBC放送を聞くのか」というアンケートに対して『ニュースが正確で早い』という答えが多かった³⁵⁾とか、「BBC(日本語)が好きになりました。第1の目的はニュース、私はアフリカや中東方面に関心があります。最近ではアフガニスタンのクーデター、その後の動静を知るのも楽しみです。新聞記事の紹介も、ヨーロッパの情勢を知るのに有益です³⁶⁾」といった手紙が『短波』誌編集部に寄せられている。国際放送局の多くは、ニュースとはいっても生放送で対応するのではなく、事前に収録したものを放送することが多い中で、BBCでは、「ニュースはテープを使うことはなく、ニュースを読んでいる最中でも新しいニュースが入れば、それを訳してすぐ原稿を手渡すこともあります³⁷⁾」といったように、報道を重視する姿勢が、制作の取り組みからもうかがうことができた。

しかし、この時期、BBC日本語放送は運営上の大きな課題に直面していた。1979年に誕生したサッチャー政権の経済政策の影響を受け、日本語放送を含む、BBC国際放送の削減問題が緊急の課題として浮上したのであった。こうした動きに対し、聴取者の多くは日本語放送の存続を訴えた。

「BBCは今まで、公正、正確なニュース放送局として、海外の信頼を集めてきました。日本人のイギリスに対する理解を深める点で、イギリスから直接に日本人に語りかけてくる点で、唯一の「声」だと思います。いかに海外旅行が盛んであっても、旅行では表面しか見ることができないのではないのでしょうか。それに対して

放送は、表面は見えなくても内面を押し量ることができるものだと思います。そして、この「国の内面」というものがイギリスの理解について大変重要なものだと思うのです。その意味でBBCの日本語放送は必要不可欠のものだと思うのです³⁸⁾」

また、ラジオ・オーストラリアの日本語アナウンサー左右田敏氏は、1990年12月31日の最後の放送で「われわれの放送内容が外部からの管理・統制なしに自由にやれた」と語っていた。同じく日本語アナウンサーの西里扶子氏も、著書の中で次のように記していた。

「オーストラリアという国が持つ政治的な立場が、放送というメディアにとって幸運な形で反映しているということがいえると思う。つまり放送という媒介を通じてまで、海外に直接、生の形で訴えなければならぬ政治的立場に立たされていないために、ラジオ・オーストラリアの使命は、政治的にはまさに無色透明な形で、『オーストラリアという国の、人間、文化、社会を紹介する』という一語に尽きる。従って、日本語を話し、日本で教育を受け、日本語で思考する、まさに日本人である日本語課のスタッフが、メルボルンのスタジオで、メルボルンの空気を呼吸しながら、日本列島にむけて語りかけるという行為そのもので、すでに目的の半分は達成されているとっていいと思う³⁹⁾」

英国やオーストラリアのメディアが、政府から距離を置いて運営することができた一方で、南北が分断されたまま休戦状況が続いていた韓国の場合は状況が異なっていた。

ラジオ韓国では、韓国国内のニュースに比し

て、国際ニュースが少ないことから改善を求めた聴取者に対して、「この放送は世界に韓国の国内のありかたを放送するのが基本であるから仕方がない」⁴⁰⁾と回答していた。ところが、民主化を求める市民たちが軍隊と衝突して、多数の死傷者を出した1980年5月の「光州事件」では、その報道姿勢をめぐり、ラジオ韓国を含む韓国の報道機関はその存在意義を問われることになった。BCL関連書籍の執筆などを通じて日本のBCLで主導的役割を果たしてきた山田耕嗣氏は、ラジオ韓国の報道姿勢を痛烈に批判している。

「日本のすべてのマスコミは光州事件の生々しい銃撃戦を連日トップで取り上げ軍隊による同胞の殺害を伝えた。KBSを除く世界すべての日本語放送が光州事件を大々的に取り上げていた。韓国で発生した事件なので、光州事件をどのように伝えるのかと思ってKBS日本語放送を聴き続けた。ところが光州事件の報道はない。市街戦などは10日間で終わり5月27日に幕を下ろしたが、この期間のKBS日本語放送はニュースでも解説でも光州事件にはまったく触れなかった。放送を聴いているとノーテンキなことを言って笑っているときがあったが、そのとき「こんな日本語放送なら止めちめえ」と思った」⁴¹⁾

当時、政府によって言論統制が行われていた韓国において、KBS(ラジオ韓国を含む)が光州事件を正確に報道することは事実上、困難な状況にあった。公正・中立な報道ができない中であって、ラジオ韓国は、人気を獲得するために、お便り紹介番組をはじめとした聴取者との交流に重点を置かざるを得なかった。

〈日本人ジャーナリストの活用〉

日本語放送を運営する国際放送局にとって、日本人スタッフは欠かせない存在であり、BBCやラジオ・オーストラリアなどは早い時期から日本の放送局と提携し、プロの放送人の確保に努めていた。

1979年時点ですでに日本語放送開始から36年が経過していたBBCの場合、日本語部で働いた放送人は50人以上、新聞記者や大学教授まで含めると70人ないし75人程度になっていた⁴²⁾。1980年4月時点におけるBBC日本語部のスタッフは、北村元、一花俊、小出五郎、前田幸子、高雄孝昭、滝川恵史、浜野崇好、松浦茂長、小林健人であった⁴³⁾。NHKからは科学産業番組班からの小出五郎氏や経済担当解説委員であった浜野崇好氏ら3人が、また、大阪の朝日放送からは放送記者の一花俊氏、ニュースデスクの滝川恵史氏といった報道系の人材が、このほか、日本テレビ、フジテレビ、テレビ朝日からも放送のプロが集められた⁴⁴⁾。番組では英国の様々な話題を、英国人記者が書いた原稿の翻訳ではなく、日本語部員が自ら取材して放送したが、番組は、取材にウラ打ちされた各部員自身の、ものの見方が反映されていた⁴⁵⁾。テーマは各自の好みで、歴史の散歩や、レストランめぐり、民話と伝説、評判の良かった『シャーロック・ホームズ』も、こうして日本語部の中で独自に制作された⁴⁶⁾。

一方、ラジオ・オーストラリアは、1963年にNHKとの間で交換アナウンサー協定を結んだことにより、NHKからアナウンサーが原則として2年交代で派遣されるようになっていた。これに加えて、1971年にダグラス・ヘルニア(Douglas Helleur)氏が日本語課長に就任

すると、大村清・知子夫妻（秋田放送）、後藤修三氏（フジテレビ）、西里扶雨子氏（北海道放送）、皆森洋子氏（テレビ宮崎）など民放出身者を集めて、番組内容を若者向けに一新、折からのBCLブームに対応した⁴⁷⁾。

V. 聴取者の反応

ここまで、日本語放送の時間量、受信状況、人気番組等について公共放送を中心に見てきた。そして1970年代、実際にどこの日本語放送局が聴取者に好感を持って受け入れられていたのかを、当時の資料を基に調べたところ、公共放送局はいずれも上位にあったことが複数の調査結果から明らかになった。

1952年設立の日本で最も長い歴史を持つ短波放送の愛好家団体「日本短波クラブ」が、1971年および1973年に実施した調査の結果を表11に示した。同クラブの会員を対象に、好きな短波放送局についての記載を求めたアンケートに対して、国内向け、海外向け、日本語放送、外国語放送の区別なく、全部で57の放送局の名前が挙がった。それによると、1973年の調査では1位がオーストラリアのABC、すなわちラジオ・オーストラリアで、1971年の調査に続き、2位と大差をつけての首位であった。2位は1971年と同様、BBCであった。アンケートでは放送局単位での質問となっているため、必ずしも日本語放送に限定したものではないが、おそらく大半が日本語放送に対する得票と考えられる。1位との差は大きい、3位との差もまた大きく、3位の倍以上の票を得ている。3位には、1971年に3位であったドイツ・ヴェレをおさえて宗教局の極東放送（FEBC）が入った。この年に国営放送から公共放送に転換した韓国のKBS（ラジオ韓国）は10位で

あった⁴⁸⁾。

1980年には、当時、日本における短波放送の愛好家団体のうち、最大規模を誇っていた「日本BCL連盟」が、会員を対象に好きな放送局についてアンケート調査を行っている（表12）。それによると、ベスト10は1位から順に、①ラジオ・オーストラリア、②BBC、③北京放送、④VOA、⑤ラジオ韓国、⑥ドイツ・ヴェレ、⑦自由中国之声（台湾）、⑧トランス・ワールド・ラジオ（グアム）、⑨ラジオ・ネーデルラント、⑩モスクワ放送、であった⁴⁹⁾。

表 11 好きな放送局（1973年実施）

順位	放送局名	投票数
1	ABC・オーストラリア	252 〈162〉
2	BBC・イギリス	175 〈80〉
3	FEBC・フィリピン	76 〈35〉
4	DW・西ドイツ	71 〈63〉
5	HCJB・エクアドル	64 〈57〉
6	ラジオ・ネーデルラント	39
7	VOA・アメリカ	38 〈24〉
8	モスクワ放送	35
9	SBS・スイス	32 〈28〉
10	KBS・韓国	27

（〈 〉内は1971年）

出典：『SW DX GUIDE』第22巻第6号、1973年6月、27頁

表 12 好きな放送局（1980年実施）

会員向けアンケート

順位	放送局名
1	ラジオ・オーストラリア
2	BBC
3	北京放送
4	VOA
5	ラジオ韓国

出典：『日本BCL連盟』の記録』名越眞之、2011年、31頁

『短波』誌読者向けアンケート

順位	放送局名
1	ラジオ・オーストラリア
2	BBC
3	ドイツ・ヴェレ
4	北京放送
5	ラジオ韓国

出典：『短波』通巻第59号、1981年1月、146頁

また、同年、日本BCL連盟は自らが発行する聴取者向けの情報誌『短波』誌上においても「放送局人気投票」を実施している(表12)。読者からの投票の際、好きな放送局を1位から3位まで記入してもらい、それぞれ3点、2点、1点として換算した結果、投票総数1076通で、①ラジオ・オーストラリア(1380点)、②BBC(659点)、③ドイチュ・ヴェレ(572点)、④北京放送(464点)、⑤ラジオ韓国(448点)、⑥自由中国之声(379点)、⑦トランス・ワールドラジオ(331点)、⑧アンデスの声〈エクアドル〉(305点)、⑨ラジオ・ベリタス・アジア〈フィリピン〉(230点)、⑩極東放送(155点)、となった。一方で、下位にランクされた日本語放送実施局は、ラジオ・タイランド(31位、23点)、国連放送(30位、25点)、グアムのKUAM(28位、27点)、スリランカ放送協会(27位、30点)、アルゼンチン国営放送(25位、32点)などであった⁵⁰⁾。

アンケート結果からも、常にラジオ・オーストラリアがトップであったことが分かる。そして、ラジオ・オーストラリアからは大きく水をあげられていたものの、BBCが2位であるという構図に変わりはなかった。3位以下はその時々で多少の変動はあるが、公共放送の中では、ラジオ・オーストラリア、BBCに次いで人気が高かったのがドイチュ・ヴェレ、そして、7年の間にラジオ韓国も人気を上昇させた。

日本語放送局の人気の度合いを見る上ではこのほかに、『短波』誌に毎月掲載されていた「海外日本語放送 DX REPORT & NEWS」への投書数が参考になる。1979年1年間の各局に対する投書数を算出した結果、総計8204本のうち、1位ラジオ・オーストラリア(823本)、2位ラジオ韓国(637本)、3位BBC(613本)、

4位自由中国之声(597本)、5位ラジオ・ベリタス・アジア(578本)、6位ドイチュ・ヴェレ(504本)という結果が出た。また、投書が少なかった放送局は下から順に22位KATBおよびKUAM(22本。ただし、10月から12月までの3か月間のみの掲載)、21位スリランカ放送協会(120本)、20位アルゼンチン国営放送(151本)、19位アンデスの声(154本)、18位ベトナムの声(181本)、17位国連放送(191本)などであり、いずれも受信状況の良くない放送局であった。投書の中には放送局に対する批判的な内容も多々あり、投書数の数がすなわち人気の高さともではいえないが、当該放送局がどの程度関心を持たれていたのかを推測することはできる。実際、放送局の人気を調査した結果とこの投書数の算出結果は大枠において同じである。

おわりに

1970年代、BCLは日本の青少年の間で大流行した。とりわけ日本向け日本語放送は、発信地が日本国外にあること、不安定な短波という電波の特性と当時の収録環境、また、放送界全体では特殊な分野の放送であることなど、様々な要因による資料上の制約から、これまでほとんど研究対象とされてこなかった。しかし、各国が外国向け情報発信を強化している今日、日本語放送の事例は単に旧型メディアの歴史発掘にとどまらず、現在においても、情報の「送り手」が「受け手」に対して、いかなるコンテンツを、どのような状態で届けるのが望ましいのか、とりわけ、将来を担う「受け手」側の若者の中に「ファン」を増やすための方策を検討する場合には、有用な素材になりうると考えた。

本稿では、当時の日本語放送を検討した結果、聴取者から高い支持を得るための要素として、以下に記す4つの点を確認することができた。日本語放送実施局のうち、特に公共放送局は、その多くの要素を満たしており、BCLブームを送り手の側から支えていたという事実が明らかになった。

第1に、ある程度まとまった量のコンテンツを発信することの必要性である。当時、人気がなかった放送局の多くは放送時間量が1日あたり1時間を切っており、場合によっては毎日放送が行われないケースもあった。放送時間が長ければ必ずしも良いというわけではないが、ある程度の放送時間を確保することで、番組にもバリエーションが出てくると考えられる。

第2に、番組の受信環境を整えることの大切さである。不人気な放送局の多くは受信状態が悪く、聴取者が番組を楽しめる状態ではなかった。公共放送局もこの点については課題を抱えており、地理的な事情、時期によって変化する電波状況などにより、放送局によっては、必ずしも聴取者に対して十分な受信環境を提供できてはいなかったケースもあった。映像を主体とした現在の情報発信のあり方を検討する際にも、伝送経路の末端部分である「ラストワンマイル」をいかに整備するかといった問題が出てくるが、コンテンツが受け手に届かなければ、大量のコンテンツ発信が無駄になってしまう。

第3に、受け手国の事情に通じた人材を確保することの重要性である。特にこれらの人材が受け手国の放送機関における業務経験者であった場合、聴取者に対して何を、どう伝えるかに精通しているため、日本語放送の重要な働き手となる。BBCやラジオ・オーストラリア

の事例からもこの点は確認することができた。

第4に、ニュース、娯楽、教養など、どの分野に重点を置くのか、また、キラーコンテンツの開発によって放送局の独自性を出し、他の放送局との差別化を図ることが肝心である。日本語放送のケースでは、聴取者層が若年層であったこともあり、お便り紹介番組の人氣が最も高く、受け手は送り手との間での「双方向」のやり取りを求めていることが確認できた。とかく送り手は情報発信一辺倒になりがちであるが、主な聴取対象者、求められる番組ニーズなどを確認した上での情報発信が欠かせない。

このほか、今回は検証するまでには至らなかったが、聴取者から支持を得るために、送り手の編集権の自立と、聴取者に対する返信サービスの重要性も考慮すべき要素であろう。編集権の自立については、放送時間量が多く、受信状況が良好であっても、内容の信頼性にかかわるこの部分が不十分な場合、人氣の点からも大きなハンディを負うことになる。政府による介入を拒むことができるか否かは、コンテンツの質にも大きく関係するといえる。また、ベリカードをはじめとした各種記念品や、聴取者からの手紙に対する迅速な返信サービスも、聴取者の関心を引きつけておく上では非常に重要な役割を果たしていたと考えられる。

BCLブームの最盛期、すなわち、1970年代から80年代の前半にかけて、一般的に日本の外に目を向けていた若者たちにとって、海外の情報を得ることは今日ほどには容易ではなかった。しかし、短波放送を聴くことで、世界中と「つながる」ことが可能であった。やがて、短波受信機は携帯情報端末に置き換わり、国際郵便で数日かけて送っていた手紙は、思いついた時に手元のメールで瞬時に送信することが

可能になった。また、不安定な短波放送も、インターネットを通じて鮮明な音声で聴くことができるようになった。地球規模での情報のやり取りを容易にした技術発展のメリットを活かしつつ、本稿で取り上げた聴取者から支持されるための要素も考慮しながら、今後、日本やその近隣諸国、さらには世界各国の若者たちが共感し合えるような番組コンテンツ発信のあり方について考えていきたい。

(たなか のりひろ)

注：

- 1) 名越眞之、紺野敦『「日本 BCL 連盟」の記録』名越眞之、2011 年、14-15 頁。
- 2) のむらとしひこ「海外日本語放送 DX REPORT & NEWS」『短波』（通巻第 45 号、1979 年 11 月、49-59 頁）参照。なお、この海外日本語放送欄の担当者のむらとしひこ氏の本名は野邑俊彦。
- 3) 1970 年代以降の BCL 全盛期、短波国際放送関連の書籍が多数出版され、その後も国際放送の関係者による回想録などが出ている。しかし、この時期に公共放送局が運営した対日放送に焦点を当てた研究は、公共放送全体としてではなく、李在武「韓国の対日放送の変遷と現状」『慶應義塾大学新聞研究所年報』No.16(1981 年 3 月、63-72 頁) のように、特定の公共放送局に絞った内容のものに限定される。本研究においては、伊藤陽一「国際放送の流れの量と方向に関する研究—モスクワ放送と北京放送の場合—」『慶應義塾大学新聞研究所年報』No.30(1988 年 3 月、41-60 頁)、井川充雄「戦後 VOA 日本語放送の再開」『メディア史研究』第 12 号(2002 年 4 月、45-64 頁)、井川充雄「冷戦期における VOA のリスナー調査—日本語放送を例に—」『応用社会学研究』No.51(2009 年 3 月、17-27 頁)、清水真「短波国際放送「ラジオ・フリー・ヨーロッパ」の方針転換に関する考察—宣伝放送から国際放送への性格変容—」『応用社会学研究』No.49(2007 年 3 月、73-84 頁) などの先行研究から多くの示唆を受けたが、いずれの研究も、公共放送局を対象とした研究ではない。公共放送局の運営による国際放送に関しては、近年、

齊藤正幸「変革期の世界の国際放送～効率化の中のメディア戦略～（第 1 回）イギリス BBC」『放送研究と調査』通巻第 735 号(2012 年 8 月、38-49 頁)、および、齊藤正幸「変革期の世界の国際放送～効率化の中のメディア戦略～（第 2 回）ドイチュ・ベレ」『放送研究と調査』通巻第 736 号(2012 年 9 月、34-45 頁) の 2 本の有用な論文が発表されたが、内容は 2012 年時点の各局の動向が中心となっている。

- 4) 山田耕嗣『新 BCL マニュアル』電波新聞社、1978 年、57-61 頁。
- 5) 山田、同上、87 頁、および、Australian Broadcasting Commission. *The Constant Voice, Radio Australia : 30th Anniversary, 1939-1969* (Melbourne : Radio Australia, A.B.C. Press, 1969, Undetermined) , pp.30-31.
- 6) 山田、同上、59 頁。
- 7) 日本向け日本語放送について、紺野敦、工藤和穂『簡単 BCL 入門』(CQ 出版社、2007 年、72-73 頁) のように、①日本に向けて自国の主義・主張を伝えるホワイト・プロパガンダとしての国際放送、②国際機関による放送、③布教を目的とした放送、と分類した上で、①についてはさらに、(1) 太平洋戦争中に開始された西側先進国からのホワイト・プロパガンダ。戦時中には日本国民に戦局を知らせることを目的に放送され、戦後には日本に民主主義を根付かせることを目的に放送された日本語放送、(2) 共産主義諸国によるホワイト・プロパガンダとしての日本語放送、(3) 近隣諸国が自国の主張を日本に伝えることを目的に行う日本語放送、(4) 日本国民の自国への関心を高めるために行う放送、という 4 つの放送形態に分類する考え方もある。
- 8) Browne, Donald. *INTERNATIONAL RADIO BROADCASTING: The Limits of the Limitless Medium* (New York: Praeger, 1982) , p.210.
- 9) 海外放送研究会編『ランラジオ別冊 海外放送はキミのもの』(自由国民社、1975 年、43 頁) 参照。
- 10) Browne, *op. cit.*, p.190.
- 11) *Ibid.*, p.191. なお、戦後ドイツでは、放送の権限は中央の連邦ではなく、州が有することになっていた。
- 12) DEUTSCHE WELLE. *DEUTSCHE WELLE: The Voice of Germany* (Köln: DEUTSCHE WELLE, The publishing year not written), p.2.
- 13) DEUTSCHE WELLE, *op. cit.*, p.7.
- 14) KBS 日本語放送編『KBS 日本語放送 半世紀の物語』韓国放送公社、ソウル、2005 年、114 頁。

- 15) Browne, *op. cit.*, pp.224-25.
- 16) 時間量の算出にあたっては, Frost, J. M., ed. *WORLD RADIO TV HANDBOOK 1972* (New York : Billboard Publications, 1972) , Frost, J. M., ed. *WORLD RADIO TV HANDBOOK 1979* (New York : Billboard Publications, 1979) , 『短波』1979年1月号を基にした。
- 17) 日本BCL連盟編『短波別冊DX年鑑1981』(日本BCL連盟, 1981年, 203頁) 参照。
- 18) のむらとしひこ編「日本語放送モニター」『短波』通巻第47号, 1980年1月, 75-77頁。
- 19) 野口実, 赤林隆仁著, ニッポン放送編『世界の放送 BCLのすべて』(国際コミュニケーションズ, 1975年, 77-83頁) 参照。
- 20) 日本BCL連盟編, 前掲書, 557頁。
- 21) 短波編集部「BCL雑談室」『短波』通巻第63号, 1981年5月, 146頁。
- 22) KBS日本語放送編, 前掲書, 29頁。
- 23) 荒井伸之(投稿者)『短波』通巻第13号, 1977年3月, 59頁。
- 24) 秋山勝彦(投稿者)『短波』通巻第18号, 1977年8月, 59頁。
- 25) 杉山善一(投稿者)『短波』通巻第30号, 1978年8月, 52頁。
- 26) 若狭聡(投稿者)『短波』通巻第43号, 1979年9月, 52頁。
- 27) 斉藤健(投稿者), 同上。
- 28) 武田学(投稿者), 同上。
- 29) 田中肇(投稿者)『短波』通巻第34号, 1978年12月, 52頁。
- 30) 浅野繁明(投稿者)『短波』通巻第12号, 1977年2月, 47頁。
- 31) 杉山明(投稿者)『短波』通巻第17号, 1977年7月, 64頁。
- 32) 三浦光一郎(投稿者), 同上。
- 33) 石井浩二(投稿者)『短波』通巻第20号, 1977年10月, 51頁。
- 34) 渡辺松雄(投稿者)『短波』通巻第19号, 1977年9月, 59-60頁。
- 35) 大西修司, 斉藤敏明(投稿者)『短波』通巻第21号, 1977年11月, 51頁。
- 36) 原田譲二(投稿者)『短波』通巻第29号, 1978年7月, 59頁。
- 37) 半沢一宣(投稿者)『短波』通巻第21号, 1977年11月, 51頁。
- 38) 池田直亨(投稿者)『短波』通巻第47号, 1980年1月, 74頁。
- 39) 西里扶雨子『青春を電波にのせて』ミリオン出版, 1977年, 48頁。
- 40) 茂木象(投稿者)『短波』通巻第43号, 1979年9月, 52頁。
- 41) KBS日本語放送編, 前掲書, 45頁。
- 42) ジョン・ニューマン「連載 ニューマン部長のBBC日記⑤」『短波』通巻第41号, 1979年7月, 30頁。
- 43) 大蔵雄之助『こちらロンドンBBC』サイマル出版会, 1983年, 245頁。
- 44) 注42に同じ。
- 45) 大蔵, 前掲書, 253頁。
- 46) のむらとしひこ「誌上再放送①BBC-ロンドン」『短波』通巻第45号, 1979年11月, 61頁。ただし, 報告者はBBCを訪れたドイチェ・ヴェレ日本語課の吉田慎吾氏である。
- 47) 日本BCL連盟編, 前掲書, 339頁, 参照。
- 48) 川口大助「アンケート集計 その1」『SW DX GUIDE』第22巻第6号, 1973年6月, 27頁。
- 49) 名越, 紺野, 前掲書, 31頁。
- 50) 短波編集部「BCL雑談室」『短波』通巻第59号, 1981年1月, 146頁。